

「今までは、馬鹿でかクスとかが蛆虫でか罵られたては数多くあつたが、」

「今までは馬鹿でかクスとかが蛆虫でか罵つて悪かつた。馬鹿でクスな蛆虫野郎と解つていながら行かまらつた私のはつが愚かだつたのだ」

なごつとスタティックに切り出されたら、これはほんのうまいミツクに十下座をいかなうてはなうか。

「本つうと、申し訳ありませんでした」

俺の渾身の十下座に對して、ハハ、紅子さんは、さういふ驚かむぢやうな顔をして居る。

「……さういふ強さをいけるのは、めい、顔を上げなうか」

「紅子さん……」

「殴つていいか」

「……」

渾身の十下座は、冷酷な言葉業断された。

殴つていいか、解つていへば、男は、顔を上げなうか、なりなうか、時が、あつた。具体的には、彼女さんの、一ターンを、五回、何かがした

時である。

俺は覚悟を決めて立ち上がり、左の頬、ではなへ、サンドバグ、まじで顔を差して出した。紅子さんは可愛らしい平手、頬を引つ、叩く、は、当然の前のように拳を握り固めて俺の鼻、柱をへし折りにかかつた。

い、鉄拳制裁。

紅子さんは見惚れるくらい無駄に綺麗なフォームで、それは、まじで殴り慣れてるんじゃないかと思つほどに美しい姿勢で、実際に彼女は殴り慣れている系の人物のだが、とにかく拳を振りかぶつた。

しかし、何を思ったか、紅子さんは鼻先数ミリのところで拳を止めた。拳圧で前髪が揺れた。寸止めの練習に付き合つてやつてゐるわけではない、本気で怒つた彼女が脅いただけで終わるわけがないのは重々承知してゐる。

怪訝に思つてゐる、紅子さんは無表情のまま拳を引つ込めた。そして、数秒の逡巡の後――

「――で、結果的に金の喰らつた拳句、明らかに誰かを攻撃する用途で使はれていたのでしか思えないほど鋭利な爪で頬を引つ掻かれた、」

三十分に渡って懇話した内容が、翔にゆつてわすか三行足らずに収められた。

紅子さんから「一度はこの無様な顔を私の前に晒すな」「喜印を受けてから三日。傷は未だ癒えず。流石に傷を晒しながら歩くわけにはいかないのよ。適当にガーゼで隠して外出していったら、たまたまはつたり、翔に出逢って説明を求められた。

懇切丁寧に説明してやるや、翔は最終的にこう結論つけた。

「それは、お前、あれだ、いっぺん死ななさい」

「ネー？」

お前、それが友人に対する言葉が。

慰めの言葉を期待していたわけではないが、もしもちょっとなんかな。

しかし、いっしょに軽薄な翔が、今、面田はいつになく真面目な真面目な面の皮のニミソトでは明らかにかに面田がらなから、説教をたねる。

「あなた可愛い彼女を待たせてるってこと、この二、三、ノートを何

回もいぼかしたの？」

「五回だ」

「五回――俺が女だったら三回で限界来てるぜー」

「やい、お前が女だったらまほ、彼氏来なさいだろ」

「誰にも付かないでもらえないほど俺が性悪って言うてたのか」

「誤解だ」

「まあ、くだらないことを言っているも仕方がない。」

「二、三、三つしたら紅子さんに赦してももらえるか、お前も」

ちやうどきかへてくれや」

あまりあてには出来ないが、とりあえずサドバウスを求め、三人よれば何とやら言いつつうらんだ。一人もすれば遁世僧への智慧は得られるのではなからうか。遁世僧とだけだけの智慧があるかは知らないが。

「それは、お前、あれだ、いっぺん死な」

「それは聞か飽きた」

いっしょに加減しないで蹴り倒すや、と、言ったら、たぶら蹴りつから言いつつな罵りやうなうたなうたなうた。

赤く腫れた鼻をさすりながら、翔が、ひびく真面目な、今度こそ本当に真面目な顔にな

「はい、いっぺん死ななさい、さあねーの」

「〜」

『その無様な顔を晒すな』を晒すな言わだたんだろ。傷が治った

顔に響くこと行けぬさういふことか。

「……………」

「……………」

「おめりてはつて、何度が瞬きを繰り返したあつ

「俺は小さく溜息をした。

「……………」

自分で無様な顔にこわれておきながら、それを見せるな
「……………」

俺の愚行の証が頬から消えるまでは、しまの彼女が拗ねてい
「……………」

「……………」

確かに彼女は、暫くは拗ねているので顔を見られたんあり
「……………」

「……………」

「……………」

で、道行く人からとんでもなく目で見られていぬ。何も知
らない人たちは、飼猫に引掻かれたのか、とか、不良が喧
嘩したのか、とか推測しているのだらう。彼女に鋭利な爪で
引掻かれたと想像している奴はいないだろ。いたとしても
そいつは千里眼が何かに違いな。

随分と恥まかして思いをせざるを得ない状況に陥っているわ
「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「スパイクで!？」

「人前で裸になれないようにしてやる」

「人前で裸になる予定なんかない!」

意地の悪い笑みを浮かべる紅子さん。この意地の悪いと、残り
りの十三パーセントほどの女のチカラがぶつかる。可愛
い葉略家がきりあげた。

こんな過激で奇烈な武装系少女と何故付き合っているかと言
えば——A4一枚程度では語れないうつろいでは、何があつた
のだ。

【おまけ】
うたかた